

永井隆 原爆の地長崎に生きて

一九四五年、八月六日、広島に、世界で初めて原爆（原子爆弾）が落とされました。

その三日後の八月九日、長崎にも原爆が落とされました。

広島では二十万人以上の人が、長崎では十五万人以上の人が、原爆で怪我をしたり命を落したりしました。そして、生き残った人々も、その後、原爆症になりました。

原爆症というのは、原爆から出た放射能を浴びて、体のいろいろな部分が悪くなる恐ろしい病気です。

永井隆はその時、長崎にいました。そして、原爆症になりました。隆は病気の体で、苦しんでいる人々を助け続けました。普通の人にはできないくらい多くのことをしました。

隆はどんなことをしたのでしょうか。隆の一生は、どんなものだったのでしょうか。

永井隆は一九〇八年、島根県の松江で生まれました。父親は医者でした。隆が一歳のとき、家族は山の中の村に引っ越しました。父親が村の医者になったからです。

その時代の村の生活は大変でした。もちろん、電気もガスも水道ありません。みんなとても貧乏で、病気で死ぬ人がたくさんいました。

父親は村の人たちを助けるために、一生懸命働きました。母親も仕事の手伝いをしました。そして、二人は夜になると、ランプの光のしたで医学のことを話し合いました。昼の仕事で疲れているのに、そのときの二人はとても楽しそうでした。

隆は、いつも布団の中からそれを見ていました。そして、いつか自分も医者になって、人々を助けたいと思っていました。

隆は勉強がよくできたので、東京帝国大学（今の東京大学）に行くだろうと、みんなは思いました。その頃、東京帝国大学が日本で一番難しい大学だったからです。でも、隆は長崎医科大学（今の長崎大学医学部）という小さな大学を選びました。そのとき、隆も世界中のだけれも、十七年後の長崎に何が起こるか知りませんでした。隆は一九二八年、長崎医科大学に入りました。大学時代は勉強だけではなく、色々なことに興味を持ち、短歌（日本の三十一文字の詩）の会に入ったり、絵を描いたりしました。隆は運動が得意ではありませんでしたが、体が大きかったので、バスケットボールのクラブも作りました。そして、他の人の何倍も練習をしたそうです。とても努力家で、どんなことでも最後まで頑張る人でした。

隆は森山という人の家から大学に通いました。森山家は長崎市（浦上）というところにありました。森山家の人たちはキリスト教の熱心な信者（神を信じる人）でした。家の前には浦上天主堂という教会がありました。

十七年後、この教会から五百メートルのところに原爆はおとされるのです。

一九三二年、大学を卒業するとき、隆は何の医者になるか決めなければなりません。ところが、風邪をひいたことから、重い病気になってしまいました。病気は治りましたが、しばらく耳がよく聞こえませんでした。これでは聴診器（胸やおなかの音を聞く道具）が使えません。それで、隆は聴診をしない放射線医学（X線を使う医学の研究）を専門に選びました。

この頃、日本と中国は戦争をしていました。日本は中国に軍隊を送っていました。一九三三年、隆も二十五歳で兵隊として中国へ行き、軍医（軍隊の医者）の手伝いをしました。

戦争で死んでいく兵隊たちや、戦争のために苦しむ中国の人々。それを見て、隆は何を感じたのでしょうか。

ある日、隆に日本から荷物が届きました。森山家の娘、緑からでした。荷物の中には、キリスト教の本が入っていました。隆は今までこのような本には興味がありませんでしたが、このときは熱心に読みました。

日本に帰ると、隆はすぐ、キリスト教の信者になりました。そして、森山緑と結婚しました。

一九三七年、隆は今度は軍医ぐんいとして、また中国へ行きました。隆は日本の兵隊へいたいだけではなく、中国の兵隊や普通の人々も同じように治療（病気を治すこと）をしました。それを聞いて、病気や怪我をした中国人がたくさん隆のところへ来ました。一九三九年には一年間で四千人の中国の人々を助けたそうです。

一九四〇年、日本に戻ると、隆は長崎医科大学の助教授になりました。そして、大学病院で忙しく働き始めました。

隆は大変きび厳しい先生で、まじめに働かない人を強く叱しかりました。しかし、仕事以外では本当に優しく温かい人でした。冗談を言うのが大好きで、いつも周りの人を笑わせていました。だから、病院で働いている人たちは、隆を「お父さんのようだ」と思っていたそうです。

一九四一年、日本はアメリカとも戦争を始めました。

一九四四年、隆は医学博士はかせになりましたが、仕事はもっと忙しくなりました。病院で働いていた人たちが、次々つぎつぎに戦争に行ってしまったので、その人たちの仕事まですなければならなかったからです。

この頃、結核けっかくという病気になる人がたくさんいました。結核になると、熱ねつや咳せきが出て、体が弱くなります。死ぬ人が多い、怖い病気でした。隆は結核の検査けんさのために、毎日、たくさんX線検査（X線で体の写真を撮る検査）をしなければなりませんでした。

戦争のせいで、いろいろな物が足りなくなっていました。X線検査のフィルムもありません。それで、隆は機械きかいに顔を近づけて見なければなりませんでした。このとき、X線をたくさん体に浴びました。これがどんなに危ないことか、隆は知っていました。でも、人々を救うためにそれを続けました。

毎日、毎日、忙しくて、家に帰るのが遅くなってしまいます。家に帰ると、子どもたちも寝ています。時々、とても疲れて倒れてしまうこともあります。そんなときは、妻の緑がやさしく世話せわをしてくれました。どんなことがあっても、家族がいることは本当に幸しあわせだと、隆は感じていました。

一九四五年の六月、隆はどうとう病気になるてしまいました。

病名は はつけつびょう 白血病 けつえき 血液の癌 がん 」。X線が原因でした。あと三年間しか生きられない」と医者は言いました。長崎に原爆が落とされる二か月前のことです。

一九四五年、八月六日、アメリカが広島に原爆を落としました。

九日、アメリカは二回目の原爆を九州の小倉というところに落とす予定でした。ところが、その日、小倉の空は、前の日に落とされた爆弾 ばくだん の煙 けむり で、飛行機から下がよく見えませんでした。そこで、アメリカ軍 ぐん の飛行機は長崎へ向かいました。隆の家がある浦上 うらかみ の教会の方へ……。

その日、隆の家にはいたのは、妻の緑だけでした。子どもたちは、おばあさんの家に行っていました。隆は大学病院にいました。

午前十一時二分、突然、目が見えなくなるくらい くらい の明るい光が広がりました。そして、信じられないくらい くらい の大きな音と強い風。大学病院は、あっと言う間に壊れ こわ てしまいました。

子どもたちは、長崎の町の上にとても大きな雲が出ているのを、おばあさんの家から見ました。それは、きのこのような形をしていて、どんどん大きくなっていきました。

隆は壊れた建物の下になって、頭 おおけが に大怪我をしてしまいましたが、やっと研究室の外に出ました。けれども、そこで見たものは……。【中略】

隆は頭から血を流しながら、生き残った病院の人たちと、怪我人 にん を助けます。

おおやけど 大火傷をした人や大怪我をした人が、病院の中にどんどん入ってきます。その人たちの数は数えられません。原爆の力はとても大きいので、怪我も、火傷 やけど も、今まで見たこともないほどすごいものでした。町中 まちじゅう が火の海になり、火はどんどん広がっていきました。

——このままでは、みんな焼け死んでしまう！——

隆たちは怪我人を安全な山の上に運びました。薬も道具も燃えてしまって、ほとんどありません。医者や看護婦も足りません。怪我人はどんどん死んでいきました。怪我をしていなくても、原爆の放射線を浴びたせいで、人々は苦しみながら死んでいきました。それは、この世の地獄でした。